

音楽 人物伝 仏教

- 6 -

福本 康之

弘田 龍太郎 (1892~ 1952)

Hirota Ryutarou

子ども向け仏教童謡から
管弦楽付き作品まで手がけた

合唱団や幼稚園の現場を軸に幅広く創作

作曲家には、主要な創作ジャンルというものがありません。仏教音楽の世界でも、芸術的な声楽および合唱作品が多い山田耕柞や、子ども向けの作品で知られる坊田壽貞（7月20日号掲載）など、それぞれの遺した作品から、作曲の傾向が見てとれます。

しかし仏教音楽の世界には、子どもから大人向け、そして大衆的なものから芸術的なものまで、まんべんなく作品を発表した作曲家もいました。大正期の終わりから昭和20年代にかけて活躍した、弘田龍太郎がその人です。

自宅音楽室でピアノを弾く弘田。東京音楽学校では当初ピアノを学び演奏家としても活躍した



その一方で弘田は、学生青年層向けの活動も行っています。

東京音楽学校（現・東京藝術大学音楽学部）に学んだ弘田は、童謡作曲家の本居長世に師事したことや、赤い鳥運動への参加によって、さらには晩年に幼児教育に携わった

（長女夫妻と共に設立した「ゆかり文化幼稚園」の園長として音楽の面から）ことなどから、童謡作曲家として評価されてきました。

仏教音楽の世界でも、仏教音楽協会から発表された《仏の子供》（詞・甲斐静也）や、園長時代に書かれ、軽快なメロディーで親しまれている《ほとけさまは》（詞・森山美苗）などの仏教童謡を発表しています。

作曲家としては、九條武子夫人の協力を得て、《無憂樹の花》など大人向けの仏教讃歌を発表しています。特に、仏教音楽の作曲家として弘田の名を知らしめることになった芸術的大作の《仏陀三部作》は、同作を初演したパドマ合唱団での活動なくしてはありえなかったと考えられます。

弘田が、こうした幅広い創作活動を展開できた背景には、ひとつには合唱団や幼稚園という、具体的な「現場」が身近にあったことが挙げられます。学生や子どもを相手に奮闘する弘田の姿が浮かんできませんか。（本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室長）